

## 音楽科(各教科の概要・授業案)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024629">https://doi.org/10.14945/00024629</a>

# 音楽科

## <研究主題>

### 主体性を高める授業過程

#### <主体性ある人間>

- 様々な状況や場面において、自己と集団・社会・ものとの関わりを意識しながら、
- 自己や集団にとって価値あるものや課題を見付けだす
  - 自己や集団の取るべき行動を決定し、実践する
  - 自己や集団の決定や行動を振り返り、評価し、改善する
- これらに、継続的に取り組むとともに、自己や集団を高め続けるよう努力する人間

国語

社会

数学

理科

音楽

美術

保健体育

技術

家庭

英語

#### <教科で育てたい生徒像>

音楽文化への理解を深め、  
生涯にわたって音楽を愛好しようとする心情を持つ生徒

#### <教科で身に付けさせたい要素>

##### 〔知識・技能〕【要素A】

- ・曲想と音楽の構造や背景との関わり及び音楽の多様性などの音楽文化について理解すること
- ・音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる用語や記号などについて、音楽における働きと関わらせて理解すること
- ・自分なりに音楽表現を工夫したり、思いや意図を音楽で表現したりするための技能を身に付けること

##### 〔思考力・判断力・表現力・その他の能力〕【要素B】

- ・音楽を形づくっている要素や要素同士の働きが生み出す特質や雰囲気を感じる力
- ・知識や技能を得たり活用したりして、音楽表現を創意工夫し、どのように表すかについて思いや意図を生み出す力
- ・音楽を自分なりに解釈する力
- ・多様な音楽表現のよさや美しさを味わい、音楽の意味や価値を生み出す力

##### 〔関心・意欲・態度〕【要素C】

- ・音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取る態度
- ・音楽の学習に主体的に取り組む態度
- ・協働して音楽活動することに喜びを感じる態度
- ・音楽を愛好する心情
- ・我が国の音楽文化への愛着や、諸外国の様々な音楽に関わる態度
- ・美しいものや優れたものに接して感動する、情感豊かな心としての情操

#### <教科テーマ>

無意識的感受を意識化する音楽授業づくり  
～表現の実感を伴う聴取活動～

## ○ 教科テーマ設定の理由

現行学習指導要領では音楽科の目標を「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」としている。

生徒は、これまでの学習の中で知り得たことを活用し、思考・判断・表現している。また、新しく出会う音楽から知覚・感受の幅を広げ、これまで無意識に知覚していたことが学習の中で意識化されて、具体的な思考・判断・より豊かな表現へとつながっていく。加えて、表現の差異や地域による音楽文化の違いなども、雰囲気感受する力を生徒は備えている。さらにその背景となる風土や歴史などを理解し、音楽についての認識を深め意識化していくことで、生徒の音楽を愛好する心情を育てていきたい。

このことから、本年度も教科テーマを「無意識的感受を意識化する音楽授業づくり」と設定した。

音楽を学習する中でもコミュニケーションが大切とされており、学習指導要領解説には「音楽活動はコミュニケーションの観点から、言語活動などとは異なる、音を媒体としたコミュニケーションとしての独自の特徴を持っている。このことも音楽文化の理解を深める意義の一つである」と記されている。

鑑賞活動で「聴く」ことは生徒も意識していることであるが、表現活動においても、より「聴く」ことへの手立てを工夫することで、実感を伴う音を媒体としたコミュニケーションが実現される。他者の意見を聴くのと同様に他から発せられる音や音楽を聴く。そこで知覚・感受したことを自己の表現へとつなげていく。また、自己の音にも耳を傾け、そこには自己との対話も生まれるであろう。

言葉だけが行き交うコミュニケーションではなく、そこに音が存在する。音楽を媒体としてのコミュニケーション活動を通して、実感を伴った学習が展開されていくことを期待している。

このことから、サブテーマを「表現の実感を伴った聴取活動」とした。

生徒は、鑑賞活動と表現活動それぞれで学んだことを結びつけて活動に取り組んでいる。特に、鑑賞活動から表現活動へのつながりは表現の工夫として強く表れている。しかし、表現活動から鑑賞活動への学びのつながりは少ないように感じる。それは、歌唱や器楽で表現する時には上手く演奏しようという意識が一番に働き、「聴く」ことに意識がむいていないからではないかと考える。それは、教える側の意識も同じである。表現活動において、「聴く」意識が高まれば、鑑賞活動における聴き方にも変化が現れるのではないかと考える。

そこで、本年度は「表現活動における、表現の実感を伴う聴取活動」を軸に研究をすすめていく。

表現の実感を伴う聴取活動により、音楽文化への理解を深め、音や音楽のもつ美しさや豊かさを感じ、更なるものを求めようとする心が養われ、生涯にわたって音楽を愛好しようとする心情をもつ姿を期待する。

## ○これまでの取組について

### 1 「伝統音楽」への取組について

昨年度までの取組として、「言葉と響き」を基盤とした実践の積み重ねがある。長唄を唄う活動、能楽を謡う活動を通して、我が国の音楽文化について理解し、どのように声で表現するかについて意図をもったり、その魅力に気づいたりすることへとつながっている。

活動の中で、自分の発する声を聴いたり互いの表現を聴き合ったりすることが、深く考え表現する力へと結びついている。

「表現すること＝音を発すること」であるが、同時に「聴くこと」を意識化することで、正しい表現、もしくはイメージどおりの表現へと近づいていく。

我が国の伝統音楽には、師の手本を真似て習得していくという伝承方法がある。師の手本を真似て自分の表現技能を高めるには、「聴くこと」が不可欠である。正しい音がどんな音であるか聴く、自分の発している音は正しいのか聴く、師の音と自分の音を聴き比べる、このようにして目指す音に近づくにはどうしたらいいのか、考え工夫していく。楽譜があっても、西洋の楽譜のような細かな表現に関する指示はない。細かいニュアンスはもちろん、序破急や間といった独特な表現についても、意識的に聴くことで知覚・感受したうえで自らの表現が実現する。

### 2 1年生における授業実践について

#### (1) 「聴くこと」を意識化する授業について

鑑賞の授業では、生徒は「聴く」ことを意識する。しかし、表現活動となるとどうしても音を出すこと、発することに集中してしまう。合唱をおこなっていても、正しい旋律を歌うために自分の声をコントロールすることはできているが、自分の声の響き、パートの声の響き、全体の響きに自然と耳を傾けている生徒は少ない。そこで、「歌いましょう」だけでなく「聴きましょう」と意識的に声をかけるように心掛ける。「フレーズの終わりをそろえて歌いましょう」「正しい長さでのばして歌いましょう」ではなく、「終わりがそろっているか、正しい長さで歌えているか聴きましょう」と声を掛ける。

教師が「聴きましょう」と言い換えるだけで、表現に変化が見られるようになった。これは、学年が上がるにつれ顕著に表れる。知覚・感受していることを表現へとつなげられるかは、何をどう「聴いているか」がポイントとなっていることがわかった。

#### (2) 合唱よりも輪唱

合唱の練習を始めたが、正しい旋律で歌うことに必死で、なかなか他声部の音まで聴く余裕がない。しかし、なるべく早い段階で他声部の音を聴くことを実感してほしいと、ウォーミングアップに簡単な輪唱の曲を用意した。輪唱は他声部の音を聴いていなければ、入るタイミングはわからない。自然と「聴く」態勢に入る。そして、自分の声部を歌っていても、引き続き他声部の声は耳に入っているようである。活動の感想からは、長い音符で重なり合った音の響きについて思いを持つ子どもが多いことがわかった。簡単な旋律なのに、それが重なり合うことのおもしろさや瞬間的なハーモニーの美しさを味わえるのは、聴くことができているからである。

#### (3) 経験や実感を伴った学習について

ひとつの楽器でも、多彩な音色を奏でることについて生徒は理解している。しかし、知識理解と知覚できることは必ずしも同じではない。それは、その知識に実感が伴っていないためだと考える。

例えば、生徒はヴァイオリンという楽器が多彩な音色を奏でることができるということは理解している。しかし、ヴィヴァルディ作曲の「春」を聴いて初期段階で知覚することの中に「音色」という視点がほとんどない。音の高さや強弱、音楽の明暗（調性など）と感受したことを関わらせて、考える生徒がほとんどである。また、強弱のみの知覚や雰囲気のみ感受に留まる生徒もいる。

今後、器楽演奏の経験や、音色について実感を伴った学習を積み重ねていくことで、知覚できることが増え、感受したことと関連づけて深く考える力が育まれると考える。そして、奏法による音色の違いや、奏者による表現の違いなどに視点がむくことを期待する。

#### (4) 楽器固有の音を知覚する活動

鑑賞の授業において「場面A」と「場面B」と同じ楽器でも音色が異なり、それによって感じられる雰囲気も違うという知覚・感受も大事だが、もっと単純に楽器が持つ固有の音を意識化することを、知覚・感受の幅を広げる手立てとして用いることも必要であると考えた。

楽器の持つ固有の音に対して、その特質を知覚・感受できるようになるためにはどのような手立てがあるか。息を吹き込んで音が出るものを持ち寄り、その音をじっくりと聴き、特徴を言葉にするという活動をおこなった。

今後、和楽器にも取り組む予定であるため「口唱歌」というものがあるということを伝え、それぞれが持ち寄った「息を吹き込んで音が鳴るもの」の音の特徴を知覚し、その音を言葉で唱歌風に表現する活動をおこなった。

#### (5) 成果と課題

ひとつの楽器でも奏法によって、いろいろな音が出ること。息づかいによって音が異なること。音の高さによっても、全く違うものに聞こえてくるということ。生徒は様々なことに気づいていた。

最初は、「ピーピーにしか聞こえない」といっていた生徒が「音の出だしがはっきりしていないから、ピーという発音ではない」「笛の音というよりは息の音が聞こえてくる」と、同じ音を何度も聴くことでその特質に気づいていた。また、同じ発音ではあるがその音を「伸ばしていると、高音と低音では母音が異なって聞こえてくる」と気づく生徒もいた。非常に単純な音でも、聴き方を変えると、これまで無意識だった音に対して意識化される。

言葉で唱歌風に表現することが本時の課題であったが、これを「楽器から出てくる音をじっくり聴いてみよう」や「できるだけ多くの音の特徴を挙げてみよう」といった学習課題にすれば、さらに生徒の「注意深く音を聴く姿」が見られたのではないだろうか。表現することを目標とすると、その過程で「聴く」ことへの意識が薄れてしまう。これは、歌唱や器楽などの表現活動においても注意すべき点である。表現活動における目標設定や課題設定においても、実感を伴う聴取活動を意識したものとしていくことが課題である。

### 3 今後の取組について

器楽演奏の経験、多彩な表現の実感を伴う教材としてふさわしいものはないか。「聴いて」「真似る」ことから入る、我が国の伝統音楽の特質をいかして「聴くこと」の大切さを実感できる教材として「能管」を選択し今後の授業で活用していく。

伝統音楽の伝承方法である、手本を聴いて真似るという活動の中で、実感を伴った知覚・感受の力が育まれることを期待する。また稽古の課程で必須となる「唱歌」も適宜活用する。